母愛し

サルスベリが咲くころ、私は思い出す。

三十数年前、竹田市の後藤基彰先生をお訪ねした折のことを。お庭のサルスベリの若木が白い花をふさふさとつけていた。「美しいですね」と奥さんにいうと「息子の大学入学記念に植えたんです」といわれた。「表の方には紅い花の老木がありますよ。私がここに嫁ぐ前からのもので、姑が私の主人の鹿児島の七高入学記念に植えたものです。姑はよく申していました。あの花が咲くころ息子は帰ってきたと。今は私が同じ思いです」。

すべて人は逝く。ああ、母の心はかくも繊細、そして美しく、それだけになんと愛しさに満たされていることだろう。

南国の私の生家にも、母が長男誕生記念に植えたという木があった。ガジマルの木、明治の末。私が七歳の時、母は死ぬ。残されたきょうだい五人はこの木だけは特別のもののように眺め続けていた。年々、それぞれの背の高さを刻んだ印はすべて兄がつ

けたもの。

その兄嗣延を母は特別大事にしていた。私たちも兄は特別、と尊敬した。兄は一家の星だった。母はガンだったらしい。末期になると、兄を傍から離さなかった。臨終は幾度かくり返された。父は庭先の鶏をす早くとらえ首を落とし、生血を飲ませては蘇生させていた。最後の臨終の時、兄は母のための砂糖汁を求めて田舎へ遠出していた。母は兄を求めて幼児のごとく泣き続けた。父は生血を口を割って注いだ。「嗣延はもう帰って来るっ。これ飲んで待つんだ」。父も必死。

細い砂糖きび二本を手にして兄が帰った時は暮れていた。深夜母は逝った。兄は母の願い通りの人になっていった。茫々六十年、今、兄も倒れて意識薄明のまま八カ月。兄嫁が、仏前で母に祈り続ける言葉は悲痛である。「嗣延よ、まだ早い、とこちらに追い返して下さい」。

（一九八六年八月二十六日）